正しき生き方[[1]](#footnote-1)

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　香山光郎

喜びの生活は正しい生活である。因果を信ずれば安心立命を得る。因果を知らないものにはいつも不安があつて、疑心暗鬼を生じる。因果を知らないものは僥倖を願ひます。肥料や草取なしで豊作を望み、それ相應の努力、苦勞なくして成功を欲します。これを慾と申します。わが分以外のものを求めることを慾と申すのでありますが、これは誠に醜いものであります。

　慾のあるものには恐怖や疑惑や不平が多い。いづれも甚だ見苦しいものであります。車中で好い座席を自分のものとしようと先を爭うさまはみつともない圖であります。闇取引といふものもそれであります。自分の分以上のものを貰はうとすることですから、恐怖が伴ふ。それが旨く行かないといふので不平を起す。まことに我儘勝手な話でありまして、車内にかういふものが一人居つても、全體の氣持を悪くする。どうせ座席はあるのです。よしや乗客が多くて立つてゐなくちやならないことがあるにしても、誰かゞ立つてゐなくちやならないのなら、自分が立つてをつて他の人を坐らせた方が氣持がいゝ。他の座席に帽子や荷物を置いて、他人の坐るのを邪魔したり、狸寝をしたりするやうなことは言語道断であります。これは皆闇の精神であり偸盗の罪であります。

　車内も隣組といふ標語がありました。汽車に乗つたら、乗降臺で、「これはおれの家だぞ。陛下の車だぞ。」と考へてほしいのです。實際がさうですから。そうすれば車内の客は皆隣組どころか家族です。同じ家族でありながらおれは樂をするぞ、お前は立つて居れ、とはいはれますまい。それでなるべく人様の迷惑にならぬやうに小さくなるべきです。小さく。席も少し取る。聲も小さく。見苦しい風もしない。ちやんと坐るべきです。見知らない他人であればこそ尚更です。旅の恥は掻き棄てゞはいけない。旅の親切は盡し棄てゞあるべきです。

　旅の時には、人間は雜念がなくて、凡てが印象深いものです。だから旅の時に盡された親切は身に沁みる。旅は道づれ世は情ですね。だから車中で、自分がやることは一種の説法なのです。お里が知れてはいけない。旅に出て、誰にも親切に叮嚀にすることは美しく奥床しいものです。

　旅の恥は掻棄て。見てゐるものがないぢ[や]ないか、といふ氣持は間違つてゐる。どうしてどうして、旅であればこそ、皆がそれはそれは注目するものです。そして遠慮なく、點數を附けるものです。あいつはなつてゐないな、親も家庭もつまらないやつだな。いはゆるお里が知れる。あいつの妻や子もあんなんだらう。これは大變です。親や妻子までも顔に泥を塗るわけです。

　親切運動があつたんですが、親切は日本人のもつとも大きな特色です。西洋人の本にも日本人は親切だと書いてある。日本人は上御一人を家長と頂いた家族だからお互に親切にし合ふのが當前です。英米などでは、国民は、いはゆる利益團體でして、共同利害のために集團生活をしてゐる、寄合世帯だから權利思想が發達してゐる。ところが日本では權利思想といふものは、誠に發達して居りませぬ。日本人はたゞ大君に仕へまつり、お互に親切にすることを人生と心得てゐた。權利云々は米英思想の感染です。かの個人主義、利益主義の感染です。米英では親子、夫婦の間にさへ權利を主張する[。]日本では近來これを新らしがつて眞似るものが出て來たのでありますが、これが大變な間違ひであつた。大東亞戦になつてから、やうやく日本は神ながらの本來の姿に返りつゝあるのです。

　職域奉公とか臣道實踐とかいふ標語が使はれて居りますが、このことばが新しいから恰かも、非常時に於ける、新しい思想であるかのやうに思はれてゐる。大いに迷惑な話です。百姓が田を作るのも、鍛冶屋さん、大工さんか仕事をするのも、皆お上のためであるといふのが、日本本然の姿です［。］御飯を頂く。お上から頂くのです。勤めさして頂く。お上に勤めさしていたゞくのです。汽車旅行の話をしましたが、汽車に乗せていたゞくのです。おれがかねを出して切符を買つたのだから、おれには汽車に乗る權利があるのだと威張るのは米英思想です。なるほど切符があり乗る權利があるのであるが、その權利をお上からいたゞいたのです。つまりは乗せていたゞくのです。あゝありがたい、私のやうなつまらないものを此んな立派な汽車に乗せていたゞくとは、かう感ずるのが日本的です。

　供出や配給をやつてゐますね。農産物も、工業製品も一應お上に差上げる。そして要るだけのものを配給していたゞく―かういふ建前です。日本の國體觀念では、これは當前です。この國土もその中にある山も川も海もその産物もみんなお上のものです。われわれ自身も大君の大御寶で、お上のものです。それは奴隷としてゞはなしに、君臣として、父子としてさうなのです。われわれは、すべてのものを差上げます。お上では、われわれが差上げる物や、勞力や、場合によつては生命をも、八紘一宇の大理想の顯現のためにお使ひになるのです。只今の大東亞戦は、實にアジアを皇道精紳の下に造りかへて、十億の民をして「その堵に安んぜしめる」即ちわれわれ日本人のやうに樂しく暮らせるやうに、立派な文化や富や法律を持たせるやうに、するための大戰爭なのです。この戰爭に勝つたら、われわれ一億の民が子々孫々幸福と光榮とを享有することは申すまでもありませぬが、たゞそれだけではないのです。もうたゞそれだけでしたら、日本も米英と同じく利己主義者だといはれるでせう。共存共榮のためです。アジア諸民族を日本人同様に引揚げてやるのです。そのために一億一心、大御軍をお助け申上げるのです。宣戰の大詔に、「萬邦共榮ノ樂ヲ偕ニスル」と仰せられ、「東亞永遠ノ平和ヲ確立シ」と仰せられました。そのために、「汝有眾ノ忠誠勇武ニ信倚シ」と仰せられ、「朕カ眾庶ハ各々其ノ本分ヲ盡シ、億兆一心國家ノ總力ヲ舉ケテ征戰ノ目的ヲ達成スルニ遺算ナカラムコトヲ期セヨ」と仰せられたのであります。

「汝有眾ノ忠誠勇武ニ信倚シ」と宜うた。このおことばはあなた方にも私にも下したまうたおことばであります。

　さてわれわれはこの一年にどれだけの御奉公を効したのであるか。深く反省すべきであります。

　われわれに命ぜられたことは各々其の本分を盡すことであります。何も本分以外のことまでもせよといふのではない。

　第一は働いて物を作ることである。遊んでゐて衣食してはならない。金持だから遊んでもよいといふことは通りませぬ。衣も食も、お上のものです。軍需品であります。おれは今日は、この仕事をしよう、そのために朝飯をいたゞかう、と念じ、今日はこれだけの働きをしたから夕飯をいたゞかう、と食事のたびごとに反省すべきであります。戰爭のために何もしないで、お上の物資を頂くことは、盗むことであり、闇である。大いなる罪であります。米一粒も農民の血や汗の結晶であり、それはおかみのものである。これをいたゞくことは誠に勿體なくありがたいことであると感謝しなければなりませぬ。世に感謝を知らぬほど醜いものはありますまい。すべてに感謝の念をもつ人は正しい人である。もしわれわれが正しく自分を反省したならば一粒の米も容易には喉を通らぬはずです。正しく反省した日には、自分が、誠に役に立たない、つまらないもので、生きてゐる値打のないものであるといふことがはつきりと見えるはずだからです。まして不平など思ひもよらぬことです。ありがたくて胸が一杯になるのが本當で、さうでないものは、たしかにどうかしてゐます。困つたものです。

　お米の配給が少い。お酒の配給が、などと不平をいふ、一體どうしようといふのですか。日本中で出來たお米で、來年の新殼の出るまで一億のものが食つて行かねばならない。お米を隱したり、浪費したりするのは、他人の食物を盗むことです。それが正氣の人間で忍れることでせうか。

　配給機構がまだ出來たばかりであるから、不備な點もあるでせう。また當局者だつて、われわれ同様の人間であるから　たまたまへまもやるでせう。しかしそこがお互さまだ。お互に宥めあひ助け合つて、立派な、圓滑な配給制変を造り上げるのが樂しみではありませぬか、それをしないで、吝をつけたり不平をいつたり、蔭口をいつたり、闇の手を工夫したりするものゝ氣が知れない。かういふ人たちは何んとかして心を入れかへて貰はねばなりませぬ。でなければ、日本から出て行つていたゞきませう。われわれはお上を信頼しようではありませぬか。

　政府や聯盟を信用しませう。江界邑のことを朝から晩まで心配してゐるのはどなたでせう。われわれ個人は各々自分のことばかり考へてゐる間に、邑全體のことを心配し、いろいろと研究してゐるのはどなたでせう。それは、邑長であるはずです。われわれは邑長に感謝しようではありませぬか。そして何かいゝ智慧があれば、邑長に差上げる。何か悪いことに氣が附いたらそつと注意して上げる。そしてわれわれの邑長をして、立派な邑長になるやうに助けあひませう。邑民が善ければ邑長は自然と善くなりませう。邑民が悪いのに邑長だけがよいといふことは難かしいでせう、邑民たちが一心になつて邑長を大事にし、これに信頼し、感謝したら、凡くらな邑長も立派な邑長になります。郡にしても道にしても一國にしてもさうですね。東條首相は立派な方に相違ありませぬが、われわれがぶつぶつ不平をいつたり、いふことを聞かなかつたりしたら戰爭はやつて行かれませぬ。それに反して、われわれさへがつちり組んで居れば東條首相も樂にやつて行かれるでせう。東條首相は全くお氣の毒です。あんな重い責任を擔つて居られるのだからその氣苦勞は大したものでせう。病氣にでもなられると大變である。大事にして上げませう。どんどん働いて物資を作る。お米を節約する。貯金をする。デマや闇を撲滅して、国民の士氣を昂揚し、國民生活を朗らかな樂しいものにしたら、屹度東條さんや小磯總督が御飯もおいしく食べられ、安らかに眠れるでせう。

畏いことでありますが、一時もわれわれのことや戰爭のことを心配してゐらつしやるお方があらせられます。われわれのやうに一時もお忘れになる時はあらせられぬ。そのお方はどなたでせうか。陛下であらせられます。お米が足りないなんて、われわれが不平をいつてゐるが、それは我儘です。陛下は一億のものゝ、今では大東亞全域のものゝことを晝夜もしかし御一生を通じて心配してゐらつしやるのです。誠に勿體ない話である。われわれは宸襟を安んじたてまつるやうに心掛けねばなりませぬ。われわれが、その本分を盡すときに朗らかになり、正しくなり、親切になる時に初めて宸襟が安んぜられるのです。

　われわれが、かういふ氣持で、朝な朝な、夕な夕な正しい心、喜びの氣持で本分を盡して居れば、この戰爭は必らず勝ちます。それのみならず、われわれ自身が不平も不安もなく落着いた、朗らかな、頼母しい人物となるから、自然と顔容も整ひ、家庭も平和になる。生活が樂しくなります。

　殊に朝鮮同胞としては、過去一年に、特別に大きい恩をいたゞいた。それは徴兵と義務教育とでありまして、これはいふまでもなく朝鮮同胞が、名ばかりでなく實に於いても、完全皇國臣民に引揚げられたのであります。われわれの子供たちは完全な臣民となるのであります。われわれは半分の臣民であつたが、子供たちは百パーセントの日本人となるのであります。一視同仁といふおことばがそのとほりすべてに實現されたのであります。こんなありがたいことはありませぬ。

　それにしては、われわれは自ら大いに反省せねばなりませぬ。果してわれわれにそれだけの實力があるのかと、虚心擔[懷]になりませう。われわれはまだまだ足りないのです。もう少し家を綺麗にしませう、神を祭るのにふさはしい清潔な、清淨な、整頓した、禮儀の正しい家庭に建直しませう。もつともつと努力して、わが日本の國柄を學び、日本を愛する心を培養致しませう。そして國語を自由に話し、日本の禮儀や作法になれて、いつ何時、貴いお方がわが家庭に見えてもまごつかぬやうに、いつ子供が兵隊にいつても内地人子弟と全くかはりのないやうに、また、内地人の娘を嫁に貰つてもこつちの娘を嫁にやつても不自由がなく、しつくり行くやうに努力しなくてはなりませぬ。

　それから最後に從來の米英的な個人主義や、古い朝鮮的な家族主義を綺麗に脱ぎ棄てゝ、天皇に歸一したてまつる日本精神に生れかはりませう。われわれの心のどの隅を拂つても拭いても、我慾の垢や不平我儘の塵の痕跡もないやうに、我々自身や家を磨き上げた時に、われわれに無限の幸福と尊敬と榮譽が加わつて來ることでありませう。

1. 『新時代』1943年3月号 [↑](#footnote-ref-1)